HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	古代印度に於ける靈魂觀念
Author(s)	坂井, 尚夫
Citation	北海道大學文學部紀要, 1, 1-8
Issue Date	1952
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33111
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_P1-8.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

古代印度に於ける靈魂觀念

坂井尙夫

古代印度に於ける靈魂觀念

坂井尙夫

印度最古の文献リグ・ヴェーダ・サンヒターを初めとする現存の重要なヴェーダ文献によつて、古代印度の靈魂觀念とその發展の一斑を窺つてみよう。併し豫め次の事實を考慮しておかなければならない。卽ち、現存の文献はその當時存してゐたと想像されるものに較べて極めて小部分であつたらうと思はれる。(註一)更にこれは特殊の階級——卽ち、婆羅門(brāhmaṇa)階級——の人々により創作或は編輯され、傳承されたことを考へれば、その當時、これ以外、一般の人々の間に、どれ程多くの、又どれ程異つた思想が支配してゐたか、殆んど想像が不可能であらう。吾々の爲し得べきことは、宛も闇夜、廣大な地域の處々に散在する僅かな火の光を結び合はせて、その全體の地形を想像する様なもので、利用し得る文献の解釋に基いて、出來るだけ穩健妥當と思はれる Bild を作り上げることである。但し、この Bild の穩健妥當ならんことを欲しても、資料の取扱ひ方やこれを構成する者の立場に隨ひ、多種多様となり得るのである。

以下に述べようとする靈魂觀念に就いても、文献の殆んど總てが、特にこれを對象としてゐるものでないから、甚だ不明瞭な點の多いのも止むを得ない。この不明瞭な點を、現在における未開民族の靈魂觀念との類似性により補はうとする試み、例へば、ヴェーダの靈魂觀念に甲乙丙なる要素が認められ、未開民族のそれに乙丙丁なる要素が存する時、前者にも丁なる要素があつたと推論するが如き見解には、(二) 兩者が文化の程度に於て甚だ異り、時代的に極めて距たつてゐるのに鑑み、やゝ穩當を欠くものがある。併し、この兩者の比較研究は興味あり、又、大いに參考となる事は言を俟たない。

さて、ヴェーダにおける靈魂は、その末期に展開されたウパニシャッドの梵我說では、宇宙の本體たる梵 (brahman) と一如たるべき人間の本質——個人我 (ātman, puruṣa, jīva) に相當し、又、ウパニシャッド以來、殆んど總ての哲學、宗教の諸派に採用され、印度思想の基調をなしてゐる輪廻說では、業 (karman) を擔つて三世に轉生を續ける輪廻の主體 (liṅga-śarīra, sūkṣma-śarīra, etc.) に該當する。それ故斯様な點からも、古代印度の靈魂觀念を明かにする事は、印度哲學、宗教の理解に極めて必要である。

* * *

最古の文献リグ・ヴェーダは後世の印度思想・文化の源流をなすものであるが、その關心は常に現世にあつた。人々は讃歌を通じ、神に希ふ恩惠は、通常、極めて現實的、具體的である。——卽ち、家畜・土地・長壽・子孫等を授ける事を希ひ、勢力の獲得・地位の向上・怨敵の屈服を祈る。隨つて、その性質上、靈魂觀念の理解に資するものは少い。何故ならば、人は現實生活に於ては、それ程靈魂の存在を强く意識することなく、それに對し鋭く反省することも無い。たゞ靈魂の肉體に於ける存在が脅かされたり、又は、それが肉體を去つてしまつたと考へられる時、卽ち、人が瀕死の重病に陷り、意識を喪つてしまつた時、又は死んだ時に於て、靈魂に對し、反省が爲され、考察が行はれるのである。隨つて讃歌としては、病人の平癒を祈るもの、死者の葬儀に關聯せるもの等に於て、これを窺知することが出來る。併し乍ら、これに依つて必ずしも統一した、矛盾の無い觀念が得られるわけではないが、少くとも、假令リグ・ヴェーダで肉體と精神とが峻別されなかつたにしろ、人間の

死後、肉體は消滅しても、その人の本質、靈魂は何等かの形で、不滅に存續するものと信ぜられ、假令人は死なくとも、瀕死の重病に陷つた際など、その精神（manas 意）は肉體を離れて遠方を彷徨ふものとみられた。(三)

そこで、この靈魂觀念に就いて知る前に、先づリグ・ヴェーダの來世觀を一應みておかう。この時代には火葬(四)と並んで土葬(五)もあつた樣であるが、前者が主として行はれ、これが死者にとつて、他界に達する最も普通な方法であつた。

死體は特別に設けられた場處に於て、一定の規定に基き、火葬に附せられるのであるが、アグニ（Agni 火）(六)神がその死體を煙と共に他界へ運ぶ。而して共に燒かれた山羊等の犧牲獸がその先導者となり、途中死者はプーシャン（Pūṣan）神(七)により護衞され、又サヴィトリ（Savitṛ）神(八)に導びかれてゆくとも云はれ、或は河を渡り、(九)その道は遠く遙けく、人間の先祖ヤマ（Yama）(一〇)が初めて父祖(一一)のためにこれを拓き、又、二匹の犬サーラメーヤ（Sārameya）(一二)がこれを守備すると云はれる。(一三)

この死者の靈の趣く世界は種々な名で呼ばれてゐるが、それに固有の名稱は與へられなかつたものの如く、(一四)善業者の世界(一五)として、不滅の光明あり、太陽の置かれたる世界、(一六)天空の中央に在り、最高天に在り、第三天、或は不滅の光明ある天の幽所(一七)といはれ、又、時に天を三歩にして涉るといふヴィシュヌ（Viṣṇu）神(一八)の足跡とも關聯し、神に敬虔なるものは好ましき住居、ヴィシュヌの最高の足跡に於て樂しむと云はれてゐる。(一九)特に元來それが太陽又はその光明と密接な關係がある事は、(二〇)後のウパニシャッドに於ける解脫者の世界との關聯に於いて注目に値ひする。

この世界では、ヤマ及びヴァルナ（Varuṇa）神(二一)が王として君臨し、死者はここで再び、新しい、而も生前に於ける樣な如何なる欠陷も無い完全なる身體を採り、(二二)父母妻子に再會し、諸神及び祖靈と共に永遠の歡樂の生活(二三)を送るのである。要するにリグ・ヴェーダに於ける死後の世界は現世に卽して考へられた理想的生活であり、(二四)ここに到るには嚴格なる苦行（tapas）をなすもの、戰場で生命を賭して鬪ふ勇者の報い(二五)とされ、或は祭祀と淨行(二六)とにより特に前者、卽ち祭祀に於いて充分な布施をなした者の報いであるとはいはれる。

然し一方、惡人の死後趣く世界を如何に考へたか。リグ・ヴェーダに既に後世の樣な地獄の考へがあつたか否かは、多くの議論のある所であるが、併し少くも、惡人のために地下に何等かの世界を考へて居た事は推知される。卽ち彼等には深い場處、(二七)無間の穴(二八)が考へられ、インドラ（Indra）神とソーマ（Soma）神に對しては「惡人を深淵に、底なき闇黑に陷し給へ。其處より彼等の一人と雖も出で來らざらむがために。」（リグ・ヴェーダ 七・一〇四・三）との祈願が捧げられて居る。併し、いづれにしても、明確にこれに關說してゐる個處は未だ無いのであるが、アタルヴァ・ヴェーダになると、明かに天界、又はヤマの王國（Yamarājya）に對し、闇黑界とし、地獄世界（nāraka lokaḥ）に言及し、(二九)そこでの刑罰としての苦しみの一端を示してゐる。(三〇)

以上により、リグ・ヴェーダで他界における死者の靈魂が、宛も生前の姿と同じく考へられ、其處での生活を充分享受し得るためには現世における個人的存在の連續でなければならず、何等かの形で總ての感覺器官を具有し、(三一)全體が微細な物質より成り、(三二)宛も煙の如く(三三)風の如く、(三四)或は影の樣なもの(三五)と考へられてゐたと思はれる。(古代ウパニシャッドに至るまで、物質的なものと精神的なものとの相異は、粗大なる物質と微細なる物質との相異として考へられてゐた。(三六)

然も、この靈的存在に對しては一定の名稱はなく、葬送の儀禮においては死者そのもの又はその代名詞を以て呼ばれてゐる。

來世觀から、以上の樣に死者の主體が漠然と考へられて居たのに對し、

同時に、死者の肉體的精神的要素は、これに對應する自然界の各要素へと分散するといふ考へ(三七)が、相互に矛盾を感じることなく存在してゐた。卽ち死者に對し、「眼は太陽に往け、氣息(ātman)(三八)は風に往け、而して定めに隨ひ(dharmaṇā)天に、地に(往け)。或は若し汝に適すとせば水に往け。身體を以て草木に住せ。」(三九)と唱へる。ここで死者の本質をなすもの、「汝」の內容は何であるか明かでないが、何か或る靈的なものが、アグニに依つて他界に運ばれてゆくと考へられ、身體の各機能が自然界に分散するといふことと何の矛盾も感じなかつたらしい。そしてこの靈的なものは、夢眠中に於ても、また重病の際にも、肉體を去つて自由に彷徨するものと考へられ、これが精神作用又は生命の中心をなしてゐると看なされてゐた。以下、リグ・ヴェーダを中心として、これを表はす主な語に就いてその內容を考察する事に依り、靈魂觀念を明かにしてみたい。

リグ・ヴェーダでも、旣に呼吸が生命に最も重要なものと考へられたため、これを意味するプラーナ(prāṇa)、アートマン(ātman)、アス(asu)等は同時に、生命、生命原理をも指す。このうちプラーナは、元來、呼氣、呼吸を指し、——アタルヴァ・ヴェーダでも同樣——全く生理的意味に用ひられ、宇宙的の風に對應し、死後これに融合する。(四〇)アタルヴァ・ヴェーダ以後、次第に重要性を增し、個人の生命そのもの、生活器官中の最勝(四一)のものとみられ、古ウパニシャッドでは(複數にて)諸感覺器官として、死時肉體を去る個人我の一要素を構成してゐる。(四二)

宇宙或は個人の本質として、ウパニシャッド思辨における中心概念をなしてゐるアートマンは最も古くプラーナと全く同樣呼吸を意味し(四三)自然現象の風(vāta, vāyu)と對應し、(四四)更に、生命、活力(四五)人體に於ける生活原理、(四六)自我、本質を意味するに至つた。ウパニシャッドではまた、靈魂、個人我として業(karman)及び(微細なる)感覺器官等の保持者とみられる。

次にアス(四七)は、呼吸から出た語の(肉體的な)生命で、思考、感覺、意欲との關聯における生命ではない。プラーナが動的に考へられたのに對し、これは靜的に(四八)考へられた。

是等、呼吸から出發した、生命、生活力を意味する語に對し、思考力から出發した語にマナス(manas 意：mens)がある。思考と認識、欲望と意志、歡喜と恐怖の依處としての「こころ」、精神である。「汝の心臟に住する、翼ある小さき魂(manaska)」云々、(四九)とある樣に、それは恐らく最も古くから心臟にあると考へられてゐた。(五〇)意識を喪つた重病人からはマナスが去つたのである。それは速かに(五一)遠くへ彷徨ふ。死者の支配者ヤマへ、天と地へ、海と山へ、太陽と曉へと。彼のマナスを人は「此處に生きんがため、住まはんがため」呼び戻さうとする。(五二)アスの去つた(五三)場合にも同樣である。更に、生と死とは屢々アス、或はマナス、或は双方が止まつてゐるか、去るかの相異に歸せられる。例へば、長壽を祈願して云ふ。「汝のアス身體を棄てざらむ事を、」(五四)或は、「汝のマナスは何處にも行くこと勿れ、失することなかれ。生ける者より離るること勿れ。父祖を追ひて去ること勿れ。」(アタルヴァ・ヴェーダ 八・一・七)。葬送に際して、生きてゐる者には「彼等のアス、ヤマに行かざらむ事を。」(アタルヴァ・ヴェーダ 一八・三・六二)と、死者には「汝のマナスは自らの處へ行け、而して父祖へと趨り趣け。」(同・二三)と祈られる。又「(死は)アスを父祖のもとへ行かしめたり。」(同・二七)と。更に、「アスとなれる(父祖)」(リグ・ヴェーダ 一〇・一五・一)といふ事が言はれ、アスの意味の決定(五五)に重要な役割をなす。そしてこの場合、アスに於て何か氣體の樣な、風の樣な、而もanthropomorphousな靈的存在を考へてゐたと(五六)想像される。そしてこの時代、吾人が考へる樣な靈魂に全面的に該當する語は無かつたにしても、その觀念は明かに存在してゐたのであつて、プラーナ、マナス、

特にアスに於てその内容を鏡知することが出來る。後、これがウパニシャッドで、プルシャ (puruṣa)、又は（個人的の）アートマン (ātman) として表現され、その内容も次第に明かになつて來た。卽ち、臨終時の觀察(五)において、肉體を離脫する靈魂に依つてその内容を知る事が出來る。これによると「識」(vijñāna) を有する我 (ātman) が生氣 (prāṇa) 及び總ての生活機能を伴ひ、更にこれに業 (karman) と、明智 (vidyā) と先慧 (pūrva-prajñā)(六)が附隨すると考へる。——而してこれが後期ウパニシャッドを(七)經て、相身 (liṅgadeha, liṅgaśarīra 又は sūkṣmaśarīra 又は ātivāhika) として發達し、ヴェーダンタ派(八)、サーンキャ派、佛教（卽ち antarābhava「中有」又は gandharva として）プラーナ等の輪廻說或は心理觀に於てそれぞれ重要な問題として考察されてゐる。

（一）　福島（辻）直四郎・ツェーゲ爾の今昔（佛教研究三ノ五、昭和十四年一三一—一三二頁）

（二）　Ernst Arbman: Untersuchungen zur primitiven Seelenvorstellung [LeMonde Oriental, XX (1926) pp. 85—226 ; XXI (1927) pp. 1—185]

（三）　Ṛgv. saṃh. X, 57—58 ; cf. Kāty. śr. sūt. XXV, 13, 20.

（四）　葬儀に關しては、高楠順次郎・木村泰賢著　印度哲學宗教史（東京・大正三年〔一九一四〕）四四五—四四九頁 L.v.Schroeder : Indiens Literatur u. Cultur. pp. 41 ff. ; H.Oldenberg : Die Religion des Veda, 4. A. 1923, pp. 571—590

詳しくは W. Caland : Die altindischen Todten-und Bestattungsgebräuche. Amsterdam, 1896 參照。

（五）　Ṛgv. saṃh. X, 18, 10—13 ; cf. VII, 89, 1. それ以外に X, 15, 14 ; Atharvav. saṃh. XVIII, 2, 34 (cf. L.v. schroeder : op. cit. ib. n. 4 ; H. Zimmer : Altind. Leben. p. 402) ; cf.
Mbh. I, 90, 17 (Hopkins : Rel. of Ind. p. 364) 後世の祭式の規定は火葬のみに關するもので (cf. Āśv. gṛh. sūt. V, 1. etc.)、たゞ二才以下の乳兒及び苦行者 (parivrājaka, yati, saṃnyāsin) が土葬にされた。(Pār. gṛh. sūt IV, 1 ; Vaikh. smārtasūt. V, 10 ; Manu V, 68—69 ; Baudh. dh. śās. I, 11, 4 ; Yājñav. sm. III, 1—2. etc,) cf. Caland : op. cit. §§ 49—50 (: pp. 93—95)

（六）　cf. A.Hillebrandt : Vedische Mythologie, 1897. § 35 (: pp 88—101)

（七）　cf. E. Siecke : Pūshan, 1914 ; W. Schulze : Pan u. Pūṣan (KZ. XLII, pp. 81 ff.)

（八）　cf. H. Oldenberg : ZdmG. LI, p. 473 ; LIX, pp. 253 ff.

（九）　Ṛgv. saṃh. X, 63, 10 ; cf. Śat. br. XIII, 8, 4, 2.

（一〇）　死者の世界における王者、後世、死神として地獄の王・判者となつたが、一方理想鄉としてのヤマの世界の考へは後になつても殘映を止めてゐる。Mbh. II, 8, 1—40. 佛敎でも夜摩天と閻魔（焰摩）の二神に別れた。
cf J. Ehni : Der vedische Mythus des Yama, 1889 ; Die ursprüngliche Gottheit des vedischen Yama, 1896

（一一）　pitar- 元來、父を意味するが、更に（特に複數 pitaras に於て）祖先、祖靈を指す。

（一二）　M.Bloomfield : Cerberus, the dog of Hades, Chicago, 1905.

（一三）　以上に就いては、Ṛgv. saṃh. I, 162, 2 ; 4 ; 163, 12 ; 13 ; X, 14, 1 ; 2 ; 11 ; 16, 1—4 ; 17, 4. 更に、Atharvav. saṃh. IV 34,4 ; XVIII, 2, 21—26 ; Vāj. saṃh. XVIII, 52 をも參照。

（一四）　アタルヴァ・ヴェーダ以後屢々用ひられてゐる天界 (svarga-, svargo lokaḥ, svargaloka-) はリグ・ヴェーダではたゞ一度 (svarge, X, 95, 18. cf. Atharvav. saṃh. XVIII, 4, 64) しか現はれず。（これに對し、svar なる語が天界の意に用ひられてゐるが Ṛgv. saṃh. X, 154, 2, cf. III, 34, 8 ; IV, 3, 8 ; VIII, 87, 3 ; IX, 86, 14)、祖界 (pitṛloka-) 神界 (devaloka-) はいづれもアタルヴァ・ヴェーダ、或はそれ以後であり、人間界 (manuṣya-loka) は通常は勿論この世界を指すが（Śat. br. XIII, 2, 4, 1）、時に月 (candramas) を以て人間界とし、人間が（死後）趣く世界を意味してゐる事もある。Jaim. up.br. III, 13, 12, cf. III, 14, 7.

（一五）　sukṛtām uloka. Ṛgv. saṃh. X 16, 4 ; Atharvav. saṃh. III, 28 6 ; IX, 5, 1 ; XI, 1, 17 ; XVIII, 3, 71 etc. ; Vāj. saṃh. XVIII, 52.

（一六）　Ṛgv, saṃh. IX, 113, 7.

（一七）　以上 Ṛgv. saṃh. X, 15, 14 ; X, 14, 8 ; IX, 113, 7—9 ; アタルヴァ・ヴェーダでも略々同樣に考へられ、最高 (XI, 4, 11)、輝ける世界 (IV 34, 2)、蒼穹の背 (XVIII, 2, 47)、第三の蒼穹 (IX, 5, 1 ; 8 ; XVIII, 4, 3)、第三の天 (XVIII, 2, 48)、又、マイトラーヤニー・サンヒター では祖靈の住むところを第三の世界とも云つてゐる I, 10, 18 (: Kāṭh. saṃh. XXXVI, 12) ; II, 3, 9 (: Kāṭh. saṃh. XII, 11)

(一八) cf. A.A.Macdonell : JRAS, 1895, pp. 165 ff. ; id. : Ved. Myth., 1897, § 17 (: pp. 37—42)

(一九) Ṛgv. saṃh. I. 154, 5.

(二〇) cf. Ṛgv. saṃh. I, 109, 7 ; IX, 113, 9 ; X, 107, 2 ; X, 154, 5 ; Taitt. br. III, 9, 10, 11 : Śat. br. 1, 9, 3, 10.

これに對し星との關係はそれ程密接でなく (Ṛgv. saṃh. I, 125, 6 : X, 107, 2 ; v. Taitt. br. 1, 5, 2, 5)〻たゞ聖仙〻特に七仙 (sapta-ṛṣayas, cf. septentriones) は天に昇り〻星になつたといはれる。Ṛgv. saṃh. X, 82, 2 ; Śat. br. II, 1, 2, 4 ; Taitt. ār. I, 11, 1, 2 (v. Mbh. III, 42, 32—39) ; Taitt. saṃh. V, 4, 1, 3 ; Śat. br. VI, 5, 4, 8.

cf. H.Oldenberg : Rel. d. Veda. p. 565, n. 3.

Barth : Rel. of India. p, 23, n. 2.

(二一) cf. A.Hillebrandt : Varuṇa u. Mitra. 1877 ; G.Dumézil : Ourános- Varuṇa 1934.

後世のヴァルナの世界に就いては Mbh. II, 9, 1—30 を參照。

(二二) Ṛgv. saṃh. X, 14, 8 ; 16, 5 ; 56, 1 ; Atharvav. saṃh. VI, 120, 3 ; III, 28, 5 ; XVIII, 2, 26 ; cf. Śat. br. IV, 6, 1, 1 ; XI, 1, 8, 6 ; XII, 8, 3, 31 ; Jaim. up. br. III, 3, 5. この意味より偽誓〻又は虫類が死體を傷けることを怖れ〻或はその一つ一つの骨が重要視されたことが肯かれる。cf. Ṛgv. saṃh. X, 16, 6 ; Āśv. gṛh. sūt. IV, 5, 1 ff. ; Kāty. śr. sūt. XXI, 3 7 ff. ; Śat. br. XI, 6, 3, 11. 更に〻或る特殊の祭式を知る者は〻具身のまゝ〻天界に達するとも云はれる。Taitt. br. III, 11, 7, 3.

(二三) Ṛgv. saṃh. IX, 113 ; X, 14, 7 ; 8 ; 15, 11 ; 16, 2 ; 5 ; X, 135 ; Atharvav. saṃh IV, 120, 3 ; XII, 3, 17.

併し〻この世界は〻必ずしも天界にあると考へられてはをらず〻ヤマは地下にあるとみられる點が〻既にリグ・ヴェーダに認められる。cf. H.Oldenberg : Rel. d. Veda, pp. 545—548 ; E.Arbman : Tod und Unsterblichkeit im vedischen Glauben (Archiv für Religionswissenschaft, Uppsala, XXV, 1927, pp. 339—387 ; XXVI, 1928, pp. 180—240)(但し〻これに對しては〻W. Wüst : Orientalische Literaturzeitung ,1930, Nr. 1, col. 64—68 を參照)

(二四) この世界をあまりにも現實的にみたゝめ〻後に至り〻この世界で再び死ぬといふ恐怖が起つて來た。そしてこの再死 (punarmṛtyu) の防止がブラーフマナ神學の最大關心事となつたのである。

cf. Taitt. br. III, 11, 8, 6 ; Ait. br. VIII, 24—25 ; Kauṣ. br. XXV, 1 ; Śat. br. II, 3, 3, 9 ; X, 1, 4, 14 ; X, 2, 6, 19 (cf. E.Windisch : Buddha u. Mārā, p. 189, n. 1) ; X, 5, 1, 4 ; XI, 4, 3, 20 ; XI, 5, 6, 9 ; X, 6, 1, 4 ff. そして古代ウパニシャッドにもこの傾向は殘存してゐる。Bṛh. ār. up. I, 2, 7 (Śat. br. X, 6, 5, 7—8) ; I, 5, 2 (Śat. br. XIV, 4, 3, 7) ; III, 2, 10 (Śat. br. XIV, 6, 2, 10)

(二五) Ṛgv. saṃh. X, 154, 2—5.

(二六) iṣṭāpūrta- Ṛgv. saṃh. X, 14, 8 ; cf. Vāj.saṃh. XVIII, 64. cf. E.Windisch : Festgr. an O.v. Böhtlingk, 1888, pp. 115—118 ; M.Bloomfield : AJPh. XVII, pp. 408 ff.

(二七) Ṛgv. Saṃh. I, 154, 3 ; I, 125, 5 ; X, 107, 2.

(二八) Ṛgv. saṃh. IV, 5, 5 (apud Sāyaṇa) 但し〻これには異論がある。(K.F.Geldner : RV.Übers. ; H.Oldenberg : Noten [ad locum] 等)

(二九) Ṛgv. saṃh. VII, 104, 17.

(三〇 Atharvav. saṃh. V, 3), 11 ; VIII, 2, 21 ; V, 19, 1 ff.

(三一) cf. e.g. Taitt. br. II, 4, 6, 6.

(三二) Atharvav. saṃh. V, 19, 3.

(三三) 火葬では總て煙となり〻骨のみが殘るから〻死者の體は他界では骨なくしてあらゆる快樂を享受し得るとも考へられてゐる。Atharvav. saṃh. IV, 34, 2 ; cf. Chānd. up. VI, 5 3.

(三四) 以下に述べる asu が觀念上「靈魂」に最も近い要素をもつてゐると思はれるが〻これは prāṇa＝vāyu と同一視され〻風〻或は hauchartig なものとして考へられてゐた。cf. Mahīdhara ad Vāj. saṃh. XIX, 49 (Ṛgv. saṃh. X, 15, 1) ; asuṃ ya iyuṣ＝ye cāsuṃ prāṇam iyuḥ, vātātmano vātarūpaṃ prāptāḥ.

(三五) 屍體の毀損に對する配慮 (cf. Ṛgv. saṃh. X, 16, 6 ; Atharvav. saṃh. XVIII, 2, 26 ; etc.) はその Schattenseele に關するもので〻この可見の肉體そのものが〻直ちに他界へ行くとは考へられない。參照 Śat. br. X, 4, 3, 9 ; II, 1, 3, 4 (II, 1, 4, 9) ; II, 2, 2, 14. 但し〻これと反對の思想のあるのも看過出來ない。(cf. Taitt. br. III, 11, 7, 3 ; Pañcav. br. XXI, 4, 3)

(三六) Chānd. up. VI, 5.

(三七) 次に擧げたリグ・ヴェーダの個處以外に〻Atharvav. saṃh. XVIII, 2, 7 ; cf. Ṛgv. saṃh. X, 58, 7 ; Śat. br. X, 3, 3, 8; Ṛgv. saṃh. X, 90 ,13; 14 ; Atharvav. saṃh. V, 9, 7 ; Ait. br. II, 6, 13 ; 後世でも肉體が死後〻原素に分解すると考へた事は死ぬ事を pañcatvam gam (五大に歸す) と言ふのでも知られる。

(三八) ＝prāṇa (Sāy.) ; ＝die Seele (Geldner), cf. Ṛgv. saṃh. X, 90, 13 ; Atharvav. saṃh. V, 9, 7.

(三九) Ṛgv. saṃh. X, 16, 13.

（四〇）　Ṛgv. saṃh. X, 90, 13 ; Atharvav. saṃh. V, 10, 8 ; V, 9, 7.

（四一）　prāṇasaṃvāda, v. Chānd. up. V, 1, 6—12; Bṛh. ār. up. VI, 1, 7—13 ; Kauṣ. up. II, 14, cf III, 3 ; Ait. ār. II, 1, 4 ; Praś. up. II, 2—4.

（四二）　Bṛh. ār. up. IV, 4, 1—2 (=Śat. br. XIV, 7, 2, 1—3) 但しこれは解脫者の（個人）我には關係しないと解される。cf. Bṛh. ār. up. IV, 4, 8 [M] ; III, 2, 11.

（四三）　Ṛgv. saṃh. X, 92, 13 ; X, 97, 4 ; X, 16, 3 ; X, 168, 4 ; VII, 87, 2 ; I, 34, 7 ; Atharvav. saṃh. XVIII, 2, 7.

（四四）　Ṛgv. saṃh. X, 16, 3 ; 13 ; Atharvav. saṃh. V, 9, 7 ; Ait. br. II, 6, 13.

（四五）　Ṛgv. saṃh. IX, 2, 10 ; 6, 8 ; X, 121, 2 ; Atharvav. saṃh. VII, 111, 1 ; XVI, 3, 5 ; Śat. br. XIV, 3, 2, 5.

（四六）　これは宛も氣息の樣なものと考へられてゐる。cf. Śat. br. X, 6, 3, 2.

（四七）　v. W.Neisser : Zum Wörterbuch des Ṛgveda, Leipzig. I. Heft, 1924, pp. 137—138 ; II. Heft, 1930, pp. 26—29.

（四八）　Atharvav. saṃh. VI, 104, 1 ; Ait. br. II, 6 ; Śat. br. VI, 6, 26, cf. II, 4, 2, 21.

（四九）　Atharvav. saṃh. VI, 18, 3 ; 參照「(アグニに對し) そのうちに心臟中のわが心を導け」(Āśv. gṛh. sūt. III, 6, 8)

（五〇）　E. Windisch : BksGW. 1891, pp. 163 ff.

（五一）　「マナスの如く速かなる」(Gedankenschnell, swift as thought) とは最も速かなことの形容として常に愛用される。
cf. e. g. Ṛgv. saṃh. VI, 62, 3 ; I, 23, 3 ; 117, 15 ; IV, 26, 5.

（五二）　Ṛgv. saṃh. X, 58. このマナスに就いては更に gatamanas "bewusstlos" Taitt. saṃh. VI, 6, 7, 2 ; Mait. saṃh. IV, 7, 2 ; Kāṭh. saṃh. XXIX, 2 を參照。

（五三）　itāsu "bewusstlos" : Taitt. saṃh. II, 1, 1, 4 ; VI, 6, 7, 2 ; gatāsu "tot" Ṛgv. saṃh. X, 18, 8 ; Atharvav. saṃh. XVIII, 2, 59 ; Śat. br. V, 2, 4, 10. parāsu. vyasu "tot" はクラシックのみ。

（五四）　Atharvav. saṃh. VIII, 2, 26. (cf. 27) 又 Atharvav. saṃh. VIII, 1, 1 ; 15 ; V, 30, 1 をも參照。

（五五）　これに關聯しては asuṇita- (Atharvav. saṃh. XVIII, 2, 56) asuṇiti, (Ṛgv. saṃh. X, 16, 2 ; 15, 14 ; 12, 4 ; 59, 5 ; 6 ; Atharvav. saṃh. XVIII, 3, 59) に一言しておかなければならない。
これはいづれも文字通りでは「アスの導びき」であるが一方「他界への移行」從つて「死」を意味し他方「靈の誘導者」(Seelengeleit, Psychopompos) 從つてこれに當るヤマ或はアグニ神が考へられる。
cf. Arbmann : op. cit. II, pp. 29—42. 更に〔註　四七〕參照。

（五六）　Nir. XI, 18 : ye prāṇam anvijyuḥ ; Durga ad locum : prāṇamātramūrtayaḥ, asthūlavigrahāḥ ; Sāy. ad Ṛgv. saṃh. X, 15, 1 : asum, asmatprāṇam ijyuḥ, rakṣituṃ prāptāḥ ; Mah. ad Vāj. saṃh. XIX, 49 : ye cāsuṃ prāṇam ijyuḥ, vātātmāno vātarūpaṃ prāptāḥ ; Sāy. ad Atharvav. saṃh. XVIII. 1, 44 : ye 'suṃ prāṇam ijyuḥ prāṇopalakṣitaṃ liṅgaśarīraṃ prāptāḥ.

（五七）　Bṛh. ār. up. IV, 4, 1—2 (=Śat. br. XIV, 7, 2, 1—3) ; cf Chānd. up. VI. 15, 1—2 ; Kauṣ. up. III, 3—4.

（五八）　以前（前世?）に爲した善惡の業に對する潛在意識か。
cf. Śaṃkara ad loc. ; Dvivedagaṅga ad śat. br. XIV, 7, 2, 3. ; Deussen : Syst. d. Ved. pp. 405—406.

（五九）　cf. Kāṭh. up. II, 6, 8 ; Śvet. up. VI, 9 ; Mait. up. VI, 10 ; Sarvop. sāra 16

（六〇）　cf. Ved. sūt. IV, 2, 6—11 ; III, 1, 1—6. (I, 4, 1—7) ; Śaṃk. ad loc. ; Vedāntas. §§ 78—122 ; Sāṃ. kār. vv. 38—40 ; Sāṃ. sūt. III, 7—16.